

福岡県国漢研究部陳情代表村名、行実兩氏の教育課程「国語科」に対する意見聴取。上原会長その他より校長協会主催の「公聴会」出席の模様の説明。

十月二十一日 小山台高校

高校長協会案について①漢文の比率十分の二を明示させる。②二年でも漢文の選択ができるようにするなど討議。

十一月五日 斯文会

十月十五日付高校長協会最終案について討議。

十二月一日 斯文会

要望書作成について意見交換。十二月一日付「要望書」作成。

十二月六日 斯文会

加藤常賢、高田貞治、内野熊一郎博士等、学識経験者を招いて意見聴取。小委員会結成。

十二月七日 斯文会

小委員会開催。運動方法の検討

十二月十五日 斯文会

上原会長文部省から意見を聴取されることについての対策研究。

漢文学習上の問題点について討議。

十二月十七日 斯文会

「漢文学習上の問題点」作成。上原会長の報告。

三月三日 斯文会

文部省より藤井、渋谷両事務官を招き、教育課程の現状と、国語科改訂の基本方針および問題点について討議。声明書提出に決定。

以上が協議会の経過の概要であるが、この協議会の構成は、現在のところ左の四団体である。

- 大学漢文教育研究会 (京都)
- 全国漢文教育懇話会 (鹿野)
- 高等学校漢文教育研究会 (上原)
- 東京都高等学校漢文教育研究会 (中里)
- なお会則には、「趣旨に賛同するその他の関係団体」とあるから、ふるって参加をお願いし、筆を置く。(この原稿作成にあたり、小山台高校の青木木寛哉先生の御協力を感謝する。)

(東京都立大泉高等学校教諭)

### 昭和三十四年度研究発表会

### 研究発表要旨

#### 一、江南義疏家と王弼佚注

高松 高 藤 原 高 男

江南義疏家に論疏二家の存在すること、及び、王弼繫辭伝注の存在したてであることは、既に論証した所であるが、茲に、王弼易注の原来の体裁を推定し、その伝来の系統を推定せんとする。更に、道藏に見られる王弼老子注の佚文を提示し、綜合的にそれらの意義を考察せんとするものである。

#### 二、唐代説に含まれる詩について

新潟大学 内 山 知 也

唐代小説は往々にしてその作品の中に詩編を含む。こういう散文

・韻文併用の物語様式は「変文」の影響によるものだ」と劉開宗はとるが、信じられない。私はそれらの詩の機能・形式の面から以上の疑問について考察したい。

### 三、新訓点法の一考察

大泉高校 志賀 一朗

訓点とは、返り点・送り仮名・句読点の総称であるが、鎌倉時代の末期に返り点・送り仮名が考案され、江戸時代の初期に今日のよくな訓読の方法が確立した。以来現在まで何等の進歩発達もしていない。世はあげて原子力を云々している昨今、独り漢文だけが旧態然としていてよいであろうか。こゝに新訓点を提案して、御批判御高説を仰ぐ次第である。

### 四、司馬相如、楊雄、班固に流れる一

#### 流文学意識

東京教育大学 鈴木 修次

司馬相如・楊雄は、政治への発言を含ませようとする方向において賦を作ろうとしたところに、一流文学者としての意識があったと評価しようとするのが班固の漢書の伝である。

(司馬遷の司馬相如伝もほぼ同様に考えられる)。そして班固もまた、その意識において賦の伝統を受け継ぐのであった。かくて漢賦は良心的な意欲の面では、政治への発言であろうとする方向において一流文学としての可能性を追求した、ということができるかと思

う。しかしこれは文学の目的を明かにすべて設定されたりくつのためめの理論であって、実際の作品を眺めるとき、政治に対する姿勢と自覚とは、かならずしも一様ではない。

いま、三人の代表作を追いつつ、文学と政治の問題をめぐるある種のパターンを考えてみたい。

### 五、魏晋南北朝における尊降服制につ

いて

香川大学 藤川 正数

周制によれば、諸侯は旁親期以下の服を絶ち、大夫は一等降して服することになっていた。この降服制について、漢魏時代には何の疑惑も懐かれなかったが晋代になると諸侯・大夫に係る尊降制を、当代社会に適用することに反対する者が現れ、元康元年(五〇二)定められた新礼においては、この制が除外された。晋の新礼が基準となつて、南朝でも、尊降制が撤廃せられ、その風潮は北魏にまで波及した。然らば、魏晋より南北朝にかけて、尊降服の制がなぜこのような発展経路をたどつたのであるか。その歴史的な意義について考察してみたい。

### 六、中原家論語家学とその系統本

東京学芸大学 新美 保秀

中原家相伝の論語本には、文永本と高山寺本との残巻がある。文永本は二巻存しており、第一巻は京都醍醐三宝院蔵で、「子路と憲

○昭和三十四年度漢文学会総会

〔漢文教育研究会〕 六月廿日 於都立小山台高校

一、研究授業 午前十時半～十二時半 青木木菟哉氏

一、研究会 十一時半～十二時半 司会 今井宇三郎氏

(イ) 開会の辞 小島委員

(ロ) 当番校挨拶 上原好一校長

(ハ) 教授者反省 舞田正達主任

(ニ) 討 論 青木木菟哉氏

一、討議会 午後一時半～三時四十分 司会 牛島徳汝氏

(イ) 問題提起 志賀 一朗氏

1、略体漢字の問題について 小島 政雄氏

2、「全国高等学校協議会」における 鎌田 正氏

(ロ) 討 論

(イ) 閉会の辞 内野委員長

〔研究発表会〕 六月廿一日 於教育大学

一、江南義疏家と王弼佚注 藤原 高男氏

一、唐代小説に含まれる詩について 新潟大学 内山 知也氏

一、新訓点法の一考察 大泉高校 志賀 一朗氏

一、司馬相如・楊雄・班固に流れる一流文学意識 教育大学 鈴木 修次氏

問」の両篇であり、他の一卷は東洋文庫蔵で「衛霊公と季氏」の兩篇である。これは中原師秀の文永五年（三二六）書写した家本である。高山寺本は、京都梅尾高山寺蔵の二卷であつて、第一卷は「述而と泰伯」の兩篇、第二卷は「衛霊公と季氏」の二篇である。そしてこれは、中原師有の嘉元元年（三〇三）書写した家本である。そこで中原家本は残卷四卷八篇であるがその中、重複篇があるので、三卷六篇となる。さて、これらの残書によつて、中原家各家本の経注文・訓説などの共通点乃至相違点の考察により、所謂中原家論語家学を究明し、併せて宗重本・宝左庵本・徳治本・元応本などの性格を検討し、その系統を明らかにしようと思う。

### 七、無と和との問題

福井大学 寺 岡 竜 含

「無とは何であるかという問題」と「和とは何であるかという問題」とは、哲学としての永遠の課題であらう。無と和とをそれぞれ探索し、概念化し表現し得たと考えた時には、恐らく無でも和でもなくなるであらう。

しかし、ここにおいては先覚が努力したあとをたどりながら、無の字源と和の字源とを考究し、無の用法と和の用法とを探索する、そうして無の問題と和の問題とを取扱い、結局妄言するならば無は体であり和は情であることに想到し、できうる限り真実に近いものを論究してみたい。